

パネルディスカッション「e-Learning の運用と課題」

コーディネータ：高見澤秀幸（一橋大学大学院法学研究科）
パネリスト： 三石 大（東北大学大学院教育情報学研究部）
不破 泰（信州大学大学院工学系研究科）
加藤 直樹（岐阜大学総合情報メディアセンター）
花川 典子（阪南大学情報処理研究センター）
喜多 敏博（熊本大学総合情報基盤センター）
安納 順一（富士通 文教ソリューション事業本部）

[高見澤] それでは、パネルディスカッションのセッションに入っていきたいと思います。私は、今回コーディネータをさせていただきます、一橋大学法学研究科の高見澤と申します。よろしくお願いいたします。

まず、簡単に私の自己紹介をさせていただきます。私は法学研究科に所属しておりますが、専門は法律ではありませんで、e-Learning システムの研究や教育システムの開発等が専門です。実は、今回、事例紹介をしていただきました信州大学インターネット大学院にも2年前に入学いたしました、この3月に卒業いたしました。学生の立場からのe-Learning を体験して今この場にいるというわけです。

そういった視点からもパネリストの方々のご意見を伺っていきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。また、フロアの方々からいろいろなご意見を伺い、議論を深めていきたいと思っておりますのでご協力のほどよろしくお願いいたします。

さて、パネルディスカッションの進め方ですが、先程、回収いたしました質問票より個別の大学の先生方に質問を承っておりますので、その質問に答えていただくことにしたいと思います。その後、共通のe-Learning に対する取り組みやLMS に対するご質問等を質問票よりピックアップさせていただき、先生方にお答えいただきながら、要所要所でフロアの方々からのご意見を伺おうかと思っております。

それでは、東北大学さんへの質問が幾つかきておりますので、よろしくお願いいたします。

[三石] では、順番にお答えさせていただきます。

1つ目ですが、「通常の授業との関係はどのようになっているのか？」というご質問をいただきました。

我々が配信している授業科目というのは、通常の授業を配信しております。実際に行っているものが中心です。現在、オンライン専用コースとして準備を進めているものもありますが、配信している授業はもともとあったものをオンライン化している形になっています。実際に対面授業でもオンラインでもやっているものがあるのですが、その関係は、社会人と学生向けの集中講義をオンラインで配信する形があります。また、対面授業で行っているものを並行してオンライン化しているものもあります。これに関しては、対面授業でも実際に行い、同じ内容のものもオンラインでも配信されているものもあります。社会人入学されている方にはオンラインで受講してもらい、一般学生には教室にきて受講してもらい、復習用に活用してもらう形になっています。こういった形式については決められた形があるわけではなく、各担当の先生方にお任せしている形になっています。

次の質問ですが、「現在、配信している授業コンテンツは実際に授業をしているものを収録したものなのか？それ用に作成したものなのか？」との質問をいただいております。

現在、配信している授業科目は全て、授業とは別にスタジオに来てもらい収録したものです。学校を揚げて広報してしまった手前もあり、ある程度格好のつく形でコンテンツを作成しなくてはならなかったり、他の先生に対してサンプルとしてお見せすることもあるため、まずは見栄えも良くしなければならぬという意図もあります。また、実際に行っている授業を収録するとなると、教室まで出向いて、専任のカメラマンが付いて収録し、更に内容を起こしていくと

という作業が発生しますし、黒板の字が見えない等、かえって手間が掛かるため、別撮りにしています。

ただ、授業の内容によって、解説が中心の授業などについては、その場で収録することを他の先生方と現在調整中です。

それから3番目は「一つのコンテンツに対してどれくらい作成する時間を要しているか？」という質問ですが、コンテンツはそれ専用で作成するわけですが、作成の手順として大きく3つのステップに分かれます。第1ステップはスライド資料を作成することになります。つまり、講義資料の作成です。作成時間については先生方によってまちまちです。既に授業でPowerPoint等を用意されている先生は時間が掛かりません。ところが、もともとオンライン化することを想定していないため、学生とのInteractionの中で授業の進め方、資料の提示方法をお決めになる授業の進め方をフレキシブルになさる先生では、資料の提示により学生の反応を考えながら資料を作成するため、非常に時間が掛かることになります。まちまちではあるのですが、先日開催されたe-Learningフォーラムで、実際の授業とコンテンツの作成では15倍程度の労力を要すると発言された先生もいらしたようです。少なくとも数時間以上は掛かるというのが現状です。第2ステップは、実際に収録する作業です。90分授業になりますから、90分の時間は掛かります。実際には学生に考えさせたり、手を動かしてもらって作業時間も考慮すると、コンテンツ自体は90分より短くなると思います。しかし、収録のカメラ設定や動作確認等があるため、90分強は掛かります。その後第3ステップとして収録されたデータをLMSシステムへ登録する作業になります。登録についてはそれほど時間を要しません。手引きに従って作業をすれば時間は掛かりません。

4番目にご質問いただいた「サポート体制はどのようになっているのか？」にお答えします。先ほどの事例紹介の中でお話しさせていただきましたが、私が所属する教育情報学研究部がISTUの支援組織になります。しかし、一つの独立の大学院になっており、所属するのは教員のみとなっております。出来たばかりの組織なので技官等もおりません。そこで時間等も足りませんので、派遣で3名の職員の方に来ていただいております。派遣(支援員)の方にどんな仕事をしていただいているかという、どういう形で収録を行ったらいいのかという説明を各先生にさせていただいております。しかしながら、新しいコンピュータシステム(LMSシステムやオーサリングツール)に抵抗のある先生方が多いので、PowerPointの資料をお持ちいただいたところで、実際の収録に対しては始めから終わりまで、補助作業を行っていただいております。更に、大学向けにカスタマイズしていただいているのですがシステムが使いづらい部分等が多少ありますので、授業の登録作業も現在は支援員にお願いしている状況です。

ユーザサポートについては、教員・学生の両方から質問が多数メールで届いております。定型的な質問については支援員に回答をしてもらっています。技術的な部分等については、教員が一件ずつ回答している具合です。FAQを作りつつという状態です。

[高見澤]ありがとうございました。サポート体制等については、共通する話題かと思っておりますので、後ほどまたお話を皆さんにお伺いしていこうと考えています。

それでは、信州大学さんへの個別質問として「講義配信しているビデオは授業中そのものか？」という質問がありましたので、不破先生にお答えいただきたいと思います。

[不破] はい。その前に、東北大学さんの今のお話を聞きながら、うらやましいなと思っていました。サポート要員がいるとか、メーカーの支援があるとかいった点です。私どもは、いわば教員がゲリラ的に作ってきたところですから、そういったサポートは無く、教官が何もかもやらなくてはならなかった経緯があります。コンテンツも全体の支援体制があって、その中で各教官が作ってきたわけでもありません。作らなくてはならないと思った教官が個別に作成してきた形になります。例えば、授業の様子をビデオで撮ってというようなものも、何らかの支援がないとなかなか撮れないので、そういったコンテンツは実はありません。

[高見澤]確かに無かったですね。

[不破] はい。少しだけあるビデオコンテンツは、ロッカールームのような場所で教官が自らビデオをセットして、その前で話して用意した PowerPoint のようなデータと連動させてというようなコンテンツが数学系の授業で少しあるだけです。

ただ、その手の授業は先ほどのアンケートで見いただきましたように、学生の評判が悪いので、他の授業と同じように文章で説明をして、一部挿絵やアニメーションが使われていて、テストがついているようなコンテンツに、教官が自ら作り直しているのが現状です。そういう形の授業は減ってきております。

しかし最近では、大学が私たちの作成してきたものに理解を示してきてくれ、援助をしてくれると言われております。また、我々も大学のそういった組織へ出向き、作成方法の教授を行っております。また、センターへ週 1 回出向き在席することで、他の学部の教官が作成のサポートをしております。大学からは援助を、我々は人を出して作成のお手伝いをするることにより他学部、他学科、一般教養科目のコンテンツ作りを進めております。そちらではカメラの前で座り、録画するという形態のものもありますが、授業そのものを録画するというものはありません。

[高見澤]先ほども少しご説明いたしましたが、私は信州大学インターネット大学院に 2 年間在学しておりましたので、学生の立場でお話させていただきたいと思っております。今ご質問のあった「講義配信しているビデオは授業中そのものか？」については、私が受講したもので科目では、授業そのものが録画配信されたものは、1 科目しかありませんでした。その 1 科目の授業をされた先生には、受講後、苦情のメールを出させていただきました。実際に、受講して役に立ったのは PowerPoint で事前に配布されていた教材とストリーミングの中の音声だけでした。実際問題、失礼ですが、退屈な授業 90 分を動画ストリーミングで受講するのは非常に苦痛でした。私自身も社会人として時間に制約のある中で授業を受けていたわけですが、分かるところは飛ばして見たいものなんです。ストリーミングだとある程度制約されてしまうので、授業中のビデオ配信というよりは、ストリーミング用のコンテンツを最初から作り直さないと実際問題は難しいのではないかと思います。

[不破] そうですね。私もそう思っています。CAI の利点は自分の学ぶスピードで学べるということだと思います。それでなければ一斉授業と変わらないわけです。VOD で配信するというのは一斉授業をただ写しているだけなので、CAI の自分のペースで学べるというものを阻害していると思います。

[高見澤]そうですね。授業のビデオをそのままキャプチャするのは手軽に作るという意味では、いいのかもしれないですが、実際問題そのまま流すには難しいのではないかと考えます。例えば、ソフトウェアのツールとしては富士通の提供している Ub!Point 等を使えば簡単にキャプチャしてモノは作成できますが、肝心の授業が、それを想定して作成していないとなかなかそのままコンテンツとして使用するのには難しいと思います。
続きまして、岐阜大学さんへの質問に移りたいと思います。

[加藤] 私のところにきている質問は、先ほど後半でお見せできなかった「事務系と Blackboard とメディア系の統合がどうなっているか？」という質問です。コースの中で事務系から持ってきてるのは、それぞれの教官、学生が履修している科目を全て持ってきていますので SOSEKI の連携のお話しと同じことだと思います。それからカタログ的に用意することもありますので、履修していない講座に対しても、同様に事務系のデータから持ってきています。ユーザについても同じです。またユーザについては IC カードのデータ管理をしている LDAP で一括認証という形で構成されています。また、その中でメディア系については、私の持っている講義もそうですが、遠隔のテレビ会議を利用しているものについてというふうに限定されていますが、そ

の中で幾つかのツールをリンクする仕組みを持っているので、連携の部分をつくる形になっています。実際にアーカイブを記録しているので、過去の分についても表示されるようになっています。こういったところが実際の連携部分になります。

その他には「コンテンツの作成についてどうしているか？」という質問もいただいております。具体的には、それぞれのコンテンツ作成等に関わる直接的なことは研修会・講習会の形で月 1 回ぐらいのペースで実施しております。対象は希望者ですので 1 回につき 40~50 人の受講者です。先ほどから言われております PowerPoint 等の基本的資料があれば比較的やりやすいということですので、それぞれの方がそういった資料をいかに用意できるのかが教員にかかってくるかと思えます。先ほど、各教室にプロジェクターを設置していますという話をいたしました。これが結構人気です。当初 50 教室に入れたのですが、その後、独自に学部で自分たちの予算で設置します等の話もあり、年度末には設置教室は倍ぐらいになると思われれます。そのように先生方が一生懸命使用されているということは、何らかのプレゼン資料を作成されているということですので、そういう意味では自主的なコンテンツ、授業資料を作成しているということになります。その他には電子テキスト的なものもあるかと思えますがそちらを具体的に進めていきたいと思っています。

それから、「IC カードで出席管理はできますか？」という質問もありますが、これはあるといいですね。という回答で、今後の課題となっております。IC カードそのものも Edy (電子マネー) 等も含めて学内のいろいろなものに利用できる仕組みはこれからの検討となっております。とりあえず全員持ちましょうというところからスタートとなっているという状況です。

[高見澤] IC カードについて私から質問させていただきたいのですが、カードは接触ですか、非接触でしょうか？

[加藤] 非接触です。具体名を挙げると SONY の FeliCa タイプのカードです。

[高見澤] 例えば、e-Learning を使用しての授業、信州大学さんの授業を私は受けていましたが、実は私が受けていなくても分からないという利点というか欠点があると受講しながら思っていました。ここで大っぴらに言っているかどうかは分かりませんが、例えば、信州大学の単位を請け負いますという組織を作って、ID とパスワードを教えてくれれば、何単位いくらでやるよ。なんていう商売が成り立つと思うのです。信州大学でもそういった話を聞いたところ、信州大学では単位を認定されても、修士課程が主なので論文を書くというその時点で不正をしたものは判明するので大丈夫だというお答えが返ってきました。例えば IC カードなんか FeliCa のデバイス自体はそれほど高いものではないので、学生証を IC カード化して遠隔で受講する学生が 3000~4000 名に USB 接続のリーダを配って、パソコンに認証させるということは有効かと思うのですがいかがでしょうか？

[加藤] 可能性として、なりすまし対策としての個人認証は考えられると思っております。ただ、私どもの大学では、現行システムは、そこまで個別の学習をさせるためのものではなく、学生はサテライトに集まってきて受講していますので、顔が見えているので大丈夫だと思います。ただ、次のステップで、そういった遠隔学習を行う際の検討項目としては有効だと思います。ただ、信州大もあまり心配していませんが、社会人の場合モチベーションが高いので、ただ単に単位をとって卒業して資格を取りたいということではないのです。学習の中身を身に付けたいという意識が高く、動機付けがしっかりしているため、いまのところ安心して良いと思います。ただ、対象者によって対応を変える見極めが必要かと思えます。

[高見澤] そうですね。よく言われるモチベーションをいかに持っていくかというのは、非常に重要なことで、成功している大学はモチベーションが非常に高いからだと言われていますが、自動的に高いというよりも、教育内容が高いから人をひきつけることができ、モチベーションが高い

ということも言えると思います。

次に、阪南大さんへの質問で「半自動採点について詳しく聞かせて欲しい」との質問がありましたのでお願いしたいと思います。

[花川] 原稿の中に半自動採点ということが書いてあったかと思います。それは評価の成績付けのところですが、もちろん先ほどデモでお見せした Web 上のテストは自動採点です。ですが、教員が最終成績（合格/不合格、A,B,C,D）をつけるときには、どうしても単純に数値だけを並べて足して、60 以上は合格、それ未満は不合格というように判断はできず、全体のバランスや課題の良し悪しを考慮しなくてはならないということで、最後の判断は教員が行うということで半自動採点と書かせていただきました。採点結果を事務システムの成績データの方へ送るのですが、Portal は事務システムにシームレスに連携しているおり、殆どのデータは参照モードなのですが、最終成績のデータだけは Portal から書き込みをすることになります。事務システムは教務データベースで非常に重要なデータベースになるわけで、そのデータベースに Portal から書き込みをすることについては非常に問題になりました。もし教務データベースに Portal から書き込みを行って、壊れた等の障害が発生する可能性を否定できないので、現実問題として自動更新という形はなくなりました。結局 CSV ファイルを教務課へ提出し、教務課で目視確認を行ってから教務課でアップする形にしています。

[高見澤]少し質問があります。個人ポータルサイトは教員、職員も学生も個々に持つことになっているのでしょうか？

[花川] 今想定しているのは、教員と学生です。職員は時間割があるわけではないので、別に事務職員用の Portal があります。

[高見澤]週 1 回ログインしているパーセンテージが約 40%とご発表されていましたが、私の所属する一橋大学も社会科学系の大学で共通点があるかと思いますが、40%もログインするのはうちの大学ではありえないと思うのですが、ログインさせる工夫は何か行っているのでしょうか？

[花川] 大学のコンピュータシステムを起動しますと IE なのですが、ホームの設定をログイン画面にしてあります。そうすると習慣的にログインするようになり、お知らせ画面等をチェックするようになります。

[高見澤]IE のホーム設定がログイン画面になっているということですね。それが嫌な人は他のページに跳ぶ人もいるということですか？

[花川] そうです。

[高見澤]なるほど。ありがとうございました。

では、次に熊本大学さんへの質問です。「SOSEKI の障害対策とセキュリティについて」の質問です。回答よろしく願いいたします。

[喜多] SOSEKI は今年 5 年目になるのですが、導入当初はいろいろなトラブルがあったと思いますが、最近は大きなトラブルは聞いていません。障害対策に具体的に何を行っているか、はっきりとは私も分かりません。SOSEKI 側の話としては、障害だけでなく、最近では個人情報の漏洩問題もあるので、そういうところはどうなっているのですか？とよく質問を受けますが、とにかくログはすべて取ってあるそうです。誰がどの IP アドレスで何を行ったかはすべてログで取ってあるそうです。実際のログは見たこと無いですが・・・なので、後からのトレースはできないということになっているそうです。それと入力ミス、システム的なミスではなく、人為的な

ミスについては、事務方が目視チェックを行っているという話が先ほどありましたが、そういう作業は熊大では行っていないと思います。基本的に SOSEKI に入力するのはすべて教員が自分で入力を行います。成績については最近 CSV でアップできる機能が追加されましたので、そちらを使っています。それまではすべて 1 個 1 個手入力でした。成績登録期間を過ぎると、学生にも瞬時に表示されるようになっております。ですので、何かミスがあれば学生から申し出がすぐにありますし、教員も気がつけば修正を行います。ですから、SOSEKI は事務からわりと離れたシステムになっておりまして、教員と学生の間のやり取りするメディアになっているように思います。また、WebCT の方に SOSEKI のデータを送ることになっていますが、そのミスについても質問されているように思うのですが、今年の春から導入したため、何かあるとは思いますがまだ出てきていません。同一の会社が作成したものではないためシームレスにといいわけにはいきませんが、自分たちで工夫しながら、何とか動かしております。

[高見澤] はい、ありがとうございます。

続きまして、富士通さんにキツイ質問がきていますが、お答えできますでしょうか？

[安納] はい。質問内容は「WebCT を導入しようとした場合、富士通からのサポートは受けられるのでしょうか？」という質問です。

そうですね、どの立場から回答するかということで回答が変わるんですが、いち SE として回答いたしますと、お客様が使いたいシステムが最も良いシステムだと考えております。お客様が WebCT を使いたいとおっしゃっているのに、CourseNavig を使ってくださいとは敢えて申しあげません。が、そこは大人の事情と申しますかいろいろありまして、こういったシステムもありますので比較、検討してくださいとご紹介はさせていただくことはあると思います。しかしながら、WebCT をお使いになりたいという際でも富士通がお断りする、また商談から降りるといようなことはございません。サポートにつきましては、富士通経由でお買い求めいただいたものにつきましては、できる限りサポートさせていただきますのでご安心いただきたいと思います。…という回答でご満足いただけるでしょうか？

また、「CourseNavig が他社の LMS と統合できるのかどうか？」という質問もいただいておりますが、熊本大学の喜多先生からも SOSEKI と WebCT の連携というお話もありましたように、コンピュータ上のデータですのでデータ連携については難しい、難しくないという話は別ですが、全く問題はありません。ただ現実的に複数のシステムを導入することで生じる使い勝手の悪さというのは必ずあります。それに伴うコストは 2 倍 3 倍とかかるので、今あるから統合しようというよりは、システムの置き換えをお考えの際に一気に行うほうが今後の長い目で見た際にコスト的にお安くなるかと思えます。

[高見澤] ありがとうございます。役部長、この回答についてなにか補足はありますか？

[役] 司会を外れて、回答させていただきます。まず、WebCT を富士通からお買い求めいただく方法があります。岐阜大学様も富士通より購入いただいております。サポートの内容はまたあると思います。今、安納より回答がありましたが、各大学様で今日の発表の通り、いろいろな目的、中心とすることが異なれば、選択されるシステムの希望も違うと思います。ですので、富士通からこのシステムはできませんということではなく、できれば当社製品をお使いいただきたいなあという形でお話を進めさせていただきたいと考えております。

[高見澤] はい、ありがとうございます。以上で、個別にいただきました質問についてはご回答をそれぞれいただきましたところで時計を確認すると、あまり時間は残っておりません。ですので、いただいた質問すべてにはご回答できないようですのであらかじめお詫びしておきます。

代表的な質問の中では、コンテンツ作成に関するご質問、ご意見。それからもう一つは LMS システムを導入してどうだったかという質問に分かれているようです。

では、ご質問の中から包括している質問を選びます。「e-Learning システムを導入して困ったことは何でしょうか？また、それを解決するためにどう工夫されましたか？」という質問があります。質問の取り方によっては組織的な面で非常に困ったという話もありますし、システム的にここが苦労したというようにも取れますので一概には言えないかもしれません。また同じ質問票の中に、「今利用しているシステムの良いところ、悪いところについて」という質問もありました。両方の質問をあわせて東北大学さんから順番に回答していただけますか？

[三石] ではお答えいたします。e-Learning を導入して困っている部分ですが、組織とシステムの問題、それぞれあります。先ほども見ていただきましたが、確かにコンテンツは増えてきていますが、当初の目標に挙げていた数字より絶対的に数が少ないです。我々の大学はトップダウン的に運営されていますが、かといって総長が言おうが何しようがやってくれない先生はやってくれません。その部分は四苦八苦しているところです。しかし、やっている先生を見てなかなか良いぞと評価してくれる先生もおります。それが呼び水となり徐々に増えてきているのかなという感じはします。また特に、e-Learning にしておくことによって、休講を減らすことができますとか、授業の内容が前年との差分を取れるという効率化が図れるということも無きにしも非ずというところです。学生から好評をいただいているところもあるのでそういった点が先生方に届いてくるとモチベーションが上がっていくかと思えます。システム的に困っている点は、現在使用しているシステムは富士通のシステムですが、導入時期の問題もあり一世代古いシステムをご提供いただいているわけです。もともとが企業向けの e-Learning システムですので、そのまま大学に適用ができず、文言の違いもそうですし、かなりカスタマイズしていただいております。それでも充分とは言えない部分があり、継続的に現在も富士通にご協力いただいているところです。

e-Learning の利点として、学生にとって便利な部分もあるとは思いますが、e-Learning のコンテンツにすることによって、自分の授業の見直しがしっくり出来ると思えます。これは FD にとってとても重要なことだと思えます。私は、ISTU の基本スタイルである動画とスライド資料による授業はやっておりません。不破先生もおっしゃっていましたが、授業内容によってはこれだけでは使い物にならないだろうと思っております。私の授業がコンピュータサイエンスですので、演習等を含めないといけないのでそういった形式では行っておりません。実際には Web ページで行っていますが、授業内容を外在化することによって、何が足りないのか、学生がどこでつまづくのかが見えてくると思えます。コンテンツを作るということは大変ですが、ブラッシュアップすることは重要だと感じております。

[不破] 信州大学ですが、今日、いろいろな大学が集まっておりますが、信州大学だけが既存の LMS システムを使っているわけではない。みなさんいろいろな形で富士通の LMS のユーザであるようで、何で今日、信州大学が呼ばれているのかなあとずっと思いながらここにいるんですが、私どもは自作のシステムで行っています。それによって困ったことはたくさんあります。機能はまだまだ足りないので、高見澤さんをはじめ、学生さんからクレームがたくさんきます。そういったクレームの掲示板もあります。その掲示板への対応が悪いとまた文句を言われます。困った点としては、みなさん共通の悩みだと思えますが、コンテンツをいかにちゃんと作るのかということです。LMS を導入したからコンテンツがどんどん作れるようになりましたということなら、我々も喜んで LMS を導入しますが、いいワープロを買ったからと言って直木賞が取れるかということそういうことはない訳で、本を書くと言う作業はものすごい努力、汗をかきながらということだと思えます。ですので、コンテンツを作成することも同じだと思います。また、コンテンツは一度作れば使いまわしかということ、そうではなくて、メールや掲示板で学生より指摘が来て、いつも作り直しをしております。私ども 3 ヶ月で 1 コンテンツを作るペースで作成しておりますが、作成後も月に 2~3 回は修正をしております。それが蓄積型になっておりますので、いいのかなと思えます。また、コンテンツの著作権は各教官にあると明記しております。ですので、教官が別の大学に移る際には、コンテンツはその教官が新しい先に持ってい

くこととなります。ですから特定の LMS システムで作ったコンテンツが移った先で違う LMS システムの際に使えないというようなことが起きないように、どこでも使えることを目指しています。ただ、我々のコンテンツについてもタグをつけて SCORM には対応していきたいと思っております。コンテンツの相互利用ができるように学生にとっていいコンテンツなら誰でも利用できるようにしたいと思っております。

[加藤] 困っていることは数え切れないくらいたくさんあります。一番困ったのは、全学的という視点で導入されている大学はみんなそうだと思いますが、大学の中がいかに縦割りかということです。人事は人事システム。経理は経理システムと独自で、横の連携が無いということです。組織的な取り組みをしていなかったんだと思います。それぞれが、自分たちのルーチンワークがやりやすいように、改善するようなシステムを入れているので、全学的にユーザが出てきた際に、システム的に変更しなくてはならないところが出てくると思います。しかし、横串のための WG を作り、大学の情報化、基盤のシステムをどう作るかと言うことだと思います。どういう考え方で方略を考えるかということです。中央フロリダ大の考えている形がモデルになると思います。支えているものと、個別のシステムをデザインすればいいと思います。教員は授業を考えます。学生は喜ぶ。どの時間でも使える、コミュニケーションが取れる。いろいろな情報にアクセスができるので学生は喜ぶと思います。

[花川] 一番困っているのは、新しいシステムを導入した際には、みなさん感じるのだと思いますが、安定稼動すると言うことだと思います。新しいシステムが導入されて恐る恐る使用した先生が触った瞬間、システムがダウンすることがあるともう二度と触ってもらえないということになります。初期にはそういうトラブルが頻繁に発生するのが通常で、困っています。組織的に困っているところは、どんどん使う先生と、いまだに手書きのレポート、黒板にチョークで・・・という先生もいっしょに、学生の情報格差が非常に広がってきているのが問題だと思います。良いところは、e-Learning をすることによって、集合教育でありながらレベルごとに教育を行うことができることです。進度別に対応できるようになりました。学生がよく勉強するようになったと思います。やる気のある学生限定ですが・・・。

[喜多] e-Learning はあと数十年もすれば普通になると思います。私は実はあまり e-Learning が好きではないのですが、熊本大学でも導入時は「世の中の流れに乗り遅れてはいけない」という雰囲気がありました。良いか悪いかではありませんでした。また、実際に導入し使ってみると、それぞれの組織の事情によっていろいろ苦労されるでしょうが、そういう経験を経て初めて、活用することが出来るんじゃないかと思います。学生は物事を調べるのに Web で検索することが当たり前になってきており、図書館で調べ物をするということは二の次になっていると思います。大学で学ぶという行為の中で、決まった時間に決まった教室に行って、黒板の文字を見ながら先生の話聞いて情報を得る、というのは副次的なものになるような気がします。もちろん、純粹に知識を与えるのだけが大学の授業ではなくて、先生の熱意や思いは対面でないと伝えるのが難しいと思いますので、無くなりはないと思いますが。いずれにしても、LMS は自分で苦労して使ってみてこそ活かせるので、この質問には敢えて答えないということで答えに代えたいと思います。

[高見澤]ありがとうございました。このまま 1 時間、2 時間と話しが終わらないかと思いますが、既に予定の時間を超過してしまいました。非常に多数のご質問を受けたのですがわずかな回答しかできずお詫び申し上げます。

最後に非常に面白い質問がありましたので、これを回答していただいて終わりにしたいと思います。

「e-learning への取り組みが東北大学ではトップダウン、信州大学ではボトムアップでなされているようですが、後発チームとしてはどちらのやり方を探ったら良いのでしょうか？」

[三石] やはり実際に労を負わなくてはいけないのは教員だと思います。ですからトップダウンでやろうとしても動かないものは動かないかなという印象があります。しかし、時間等の制約やお金等の制約で困っている先生もいるので、そういう資金を投入できる仕組みを大学が整備するような形になればいいと思います。

[不破] 隣の芝生は・・・ということで、ボトムアップでゲリラ的に行っている信州大学から見るとトップダウンの東北大学さんはうらやましい限りです。上の理解もあるし、文科省から 2 億円の資金もある。でも三石先生のお話を聞いていると、こっちもいいかなと思います。教官のモチベーションが全てだと思いますので、どちらでも同じだと思います。

[高見澤] どうもありがとうございました。非常に限られた時間でしたが、パネリストの先生方には貴重なご意見をたくさん頂戴いたしました。どうもありがとうございました。これでパネルディスカッションのセッションを終わりにしたいと思います。みなさんどうもありがとうございました。